



暑中お見舞い申し上げます

特に、東北の大地震や大津波、原発事故で被災された皆さま、そのご家族、ご親族の皆さま、心よりお見舞い申し上げます。また援助に尽力されておられる皆さま、本当にご苦勞様です。暑い夏、くれぐれもお身体御自愛ください。

それにしても今回の震災のような凄まじい自然の猛威を見せつけられると、人間という存在の弱さ、はかなさを実感させられます。その一方で、たくさん大切なものを失われた方々が、少しずつ立ち上がり始められている姿を拝見すると、人間という存在の強さ、崇高さというものを感じます。弱いけれど強い、人間はそんな不思議な力を持つ存在のようです。しかしこの不思議な力は一人ぼっちでは

出てこないのではないのでしょうか。人と人との心のふれあい、その人の心に届く他の人々のいたわりや優しさ、そんなものからその力は引き出されるように思います。私どもの事務所の近くに病院があります。その病院に毎週、通っておられる老夫婦がおられます。奥さまの方はたぶん認知症気味なのでしょう、旦那さまがいたわるように奥さまの手を引いてゆっくりと歩いて病院に向かわれます。そのお二人の姿をお見かけするたびに、私の胸は優しい気持ちであふれてきて、生きる力が湧いてくるのです。お二人もそれぞれの手のぬくもりがあるから前を向いて歩いておられるのではないのでしょうか。

金子みすず「みそはぎ」という詩

があります。

ながれの岸のみそはぎは、だれも知らない花でした。
 ながれの水ははるばると、とおくの海へゆきました。
 大きな、大きな、大海で、小さな、小さな、一しずく、だれも、知らないみそはぎを、いつもおもっておりました。
 それは、さみしいみそはぎの、花からこぼれたつゆでした。

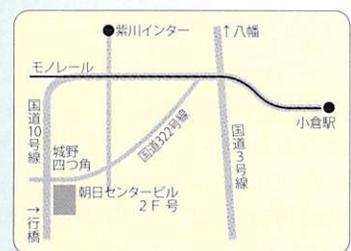
あなたのことを想い、支えようとしている人は必ずいます。もしそうじゃないのなら、この大震災を機にそんな社会にしようではありませんか。そして一緒に生きていきましょう。

■ みなさんといっしょに環境や社会の問題を考え、紙面を作っていきます。

東風

No.23

- 発行日 2011年8月1日
- 発行所 小倉東総合法律事務所
- 編集者 荒牧 啓一
- 連絡先 〒802-0062 北九州市小倉北区片野新町2丁目12番21号
 朝日センタービル2階
 TEL093(932)5575
 FAX093(932)5600
 e-mail:ponpoko@lime.ocn.ne.jp





アトムとウラン



1963年1月1日放送を開始した鉄腕アトムは我が国の夢と希望の象徴であった。科学技術の進歩が私たちに豊かさや幸せをもたらしてくれると信じていた。原子爆弾による地獄のような被害を受けた我が国で、原爆投下からわずか17年余りでアトムという名の人間以上にヒューマンイズムあふれる少年ロボットがヒーローとなったのは、当時の米ソによる殺りくの道具としての原子力利用を批判し、原子力さえも科学の力でコントロールし、人々の幸せのために平和的に使っていきたいという夢が私たちにあったからではないだろうか。しかし、その思いは裏切られた。原子力は科学からいつの間にか非科学的な「安全神話」にすり替えられていた。それが今回の原発事故で明らかになった。私たちは今後、原子力をどうすればいいのだろうか。そのことを考える材料になればと思い、様々な人々の原発に関する発言の中からおすすめのものを選び整理してみた。

作家
村上 春樹

～わたしたちが、一貫して求めてきた、平和で豊かな社会は、何によって、損なわれ、ゆがめられたのでしょうか。
答えは簡単です。効率です。「efficiency」です。(略)

安全で効率的であったはずの原子炉は、いまや地獄の蓋を開けたような惨状を呈してします。原子力発電を推進する人々の主張した現実を見なさいと言った現実とは、実は現実でも何でもなく、ただの表面的な便宜に過ぎなかったのです。それを彼らは、現実という言葉に置き換え、論理をすり替えてきたのです。それは、日本が長年にわたって誇ってきた技術力神話の崩壊であると同時に、そのようなすり替えを許してきた、わたしたち日本人の倫理と規範の敗北でもありました。「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから」わたしたちは、もう一度その言葉を心に刻み込まなければなりません。～

慶応大教授
小熊 英二

～原子力というのは今回の事態でも良く分かりましたけれども、事故処理に於いても、止めるに於いても、超法規的な権力が無ければなかなかできるものではない。(略)
原発と正式な法的手続きや民主主義は両立しない。核を管理できるだけの超強力な権力がなければできない。それが無いような国はやるべきじゃないんです。～

映画監督
鎌仲ひとみ

～スウェーデンでは、持続可能な社会に向け、地域のエネルギー資源を活用する取り組みが進んでいます。電力市場を開放していて、市民はエコマークのついた自然エネルギーの電気を選ぶことができます。(略)
私たちには消費者として電気を選ぶ権利があるはず。原発の電気を使えば、使用済み核燃料という放射性物質がどんどんたまっていく。自分たちの暮らしの延長線上に、核や放射能汚染があることを国民全員が意識し、どうしたら安心して暮らせるのか考えないといけないと思います。～

城南信用金庫
吉原毅理事長

～今回の原発事故は人間の思い上がりを象徴するものです。このような技術文明は近代合理主義の行き着いた果ての姿かもしれませぬ。経済発展は、無理のない着実な程度がよいのです。それなのに大局観もなく突き進み、成長のために原発はやめられないと思いこんだところが問題でした。

適正に計算し直すと、原発のコストは高い。地域への交付金や放射性廃棄物処理、事故対策などの費用に加え、事故があったときの補償費も、私たち金融機関からみると『経常費用』として計算に入れなければなりません。純民間ベースなら原発事業に融資する銀行は一つもないはず。～

環境エネルギー政策研究所長
飯田 哲也

～今後の電力源の主力は自然エネルギーです。海外では農業、産業、ITに次ぐ「第4の革命」と呼ばれるほどの急成長を見えています。自然エネルギーの普及は極めて短期間で実現に結びつけることができる。震災復興の経済刺激策としても、エネルギーリスクや地球温暖化防止の対策としても極めて有効です。(略)
これからは、風力や太陽光、小水力などの小規模発電の導入によるエネルギーの自給自足で、市民と地域が自らの未来を選択する「エネルギーデモクラシー」が日本に求められています。～

映画監督
高畑 勲

(89年 ふゆーじょんぶろだくと 図説 危険な話)
～自然の与えてくれる恵みとはちがひ、核や人工放射能という、タタリ強い危険なシロモノを人類は未来永劫に管理処理し続ける責任を負わなければなりません。
導火線に火をつけてしまったダイナマイトを、次々と次代に受け渡していく無責任な図は、ドタバタ喜劇のヒトコマに似ていますが、こちらは決して笑えない。ゾッとするイメージです。次代に受け渡すべきは、まず太陽の下、汚れのない大気と水、そして豊かな大地であらねばならないのに。～

Information 新鮮情報

みな様からの暮らしの智恵やおもしろ情報
お助めの書籍など、どしどしお寄せ下さい

「福島原発 どうする日本の原発政策」

安齋 育郎 著 かもがわ出版

放射線防護学者の立場から、一貫して安全神話を批判し続けてきた著者。事故の実態と対策、原発とエネルギー政策の今後。40年前からの主張内容に「未完成な技術」と利潤追求の恐ろしさ、「人災」の意味を知ります。

「宮城県気仙沼発! ファイト新聞」

ファイト新聞社 河出書房新社

気仙沼小学校で避難生活を送る8歳の少女が創刊し、その後も子どもたちの手で発行される「ファイト新聞」。大人たちを勇気づけ、マスコミでも大きく取り上げられたその紙面と、被災地の子どもたちの等身大の様子をまとめたもの。



実務修習でお世話になりました

初めまして。新第64期司法修習生の田代知愛と申します。私は、今年の3月末から約2ヵ月間、小倉東総合法律事務所
の我那覇先生の下で弁護実務修習をさせて頂きました。

我那覇先生から学んだことは、裁判の手續や法的問題について、依頼者に分かり易く丁寧に説明することのみならず、依頼者の話を沢山聞くことの大切さです。これにより、問題解決に必要な情報をより一層取得することができる上に、依頼者が話すことで精神的にも落ち着いてきて、「自らも積極的に問題を解決しよう!」「大変だけど頑張ろう!」という意欲が湧いてくるのではないかと感じました。

私も、我那覇先生のように、法律相談終了後、依頼者が表情をパッと明るくして帰っていけるように、弁護士として知識や経験を研鑽していきたいです。

実務修習中には、荒牧先生や、縄田先生、江上先生にも大変お世話になりました。依頼者の為に、多少難しそうなる法的問題であっても、あらゆる方策を尽くすこと、法律の勉強のみならず、数多くの人と接して実社会経験を積むことの大切さ等を学びました。

2ヵ月間という短い期間でしたが、とても面倒見の良い先生方や事務員さんに囲まれて、数多くの事件を傍聴させて頂き、非常に貴重な経験ができましたことを感謝しております。

いわき市からの原発震災報告

怒りの声を大きな束に

3月11日は八ッ場ダム訴訟の前橋地裁控訴審に出廷のため上京した。裁判終了後、神田駅に到着した時に電車が大きく揺れた。私は、これが大災害である事を直感し「こういう時にこそ、家に残してきた妻に元気な顔を見せるのが夫の義務である」と考えた。まず、腹を満たしておこうと思ったが、神田駅周辺の店舗が次々とシャッターを下ろしていた。ようやく見つけたスターバックスでサンドウィッチを食べながら帰宅の方法をアレコレ検討したが「こういう時にこそ、金は使うものだ」と考え、タクシーで帰る事にした。タクシーを拾うのに1時間余を要した。人の密集する駅を離れ、車が減速する工事現場付近に陣取っていたが、寒さの増してきた午後5時半過ぎに1台のタクシーが客を降ろした。私は駆け寄り、有無を言わず体を捻じ込んで、シートに沈み込み、「福島県のいわき市まで」を繰り返した。それから延々18時間半タクシーを乗り継いで、いわき市の我が家に着いたのは12日の12時過ぎであった。その後の私の人生は大きく変わった。これまでの弁護士としての蓄積の全て(と言って大したものがある訳ではないが)と、今後の作

福島県いわき市在住
弁護士 広田 次男



り出せる時間の全てを原発関連訴訟に注ぎ込むことにした。そのスタンスが被災住民に如何に寄り添うかの点にある事は言うまでもない。

原発は「難しい」課題である。まず、社会基盤の全てが破壊されているわけであるから、被害内容が極めて多様化されている。従って、過不足なく被害実態を捉えたいという要求の組織化が困難である。現場への密着を繰り返した。内水面漁業協同組合は、福島県内の川・湖ごとに19単協を結成している。「鮎は頭から尻尾まで食べるものだが、役人は頭と内臓を取って、三枚にオロシてから放射能を測っていったよ。あのやり方ではコウナゴは三枚にオロせないから放射能が高いわけだ」と組合幹部は役人への不信を露骨に語った。釣舟、渡船は小名浜港・相馬港への釣客で成り立ってきた。「釣客の釣った魚は売り出されることがないせいか、東電は俺らのことは相手にしないよ」と業者は東電への不信を露わにする。現場からは怒りの声が次々と聞こえてくる。この怒りの声を大きな束にすることから、始めていきたと思っている。